

# 転倒転落防止における患者エンゲージメント ～医療者が目指す患者の自立支援のありたい姿～

自治医科大学附属さいたま医療センター  
医療安全管理室 室長補佐  
大庭 明子

## 【講演概要】

1. 「患者主体」の意識
2. 当院の転倒転落防止策
3. 患者参加への推進課題
4. CBA

# 第20回医療の質・安全学会学術集会

## COI 開示

発表者名： 大庭 明子

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある  
企業などはありません。

# 施設紹介

## 自治医科大学附属さいたま医療センター



所在地 埼玉県さいたま市大宮区

病床数	628床 (運用病床592床)
外来患者数	1日平均 1,612人
入院患者数	1日平均 525人
平均在院日数	10.1日
病床利用率	91.5%
病床稼働率	100.5%
救急車件数	10,121台 (令和6年度)
職員数	1,655人
看護師数	803人
医師数	442人
看護体系	一般病棟7対1入院基本料

令和7年10月1日現在

# 1. 「患者主体」の意識

## ■ 患者が主役で医療者はサポート役という理解

家族 現在、何とか近くのスーパーまではひとりで歩いて行けている。  
退院後も同じ生活を送らせてあげたい。

患者 毎日スーパーまで歩いて行き、お昼ご飯を買うことが楽しみ。

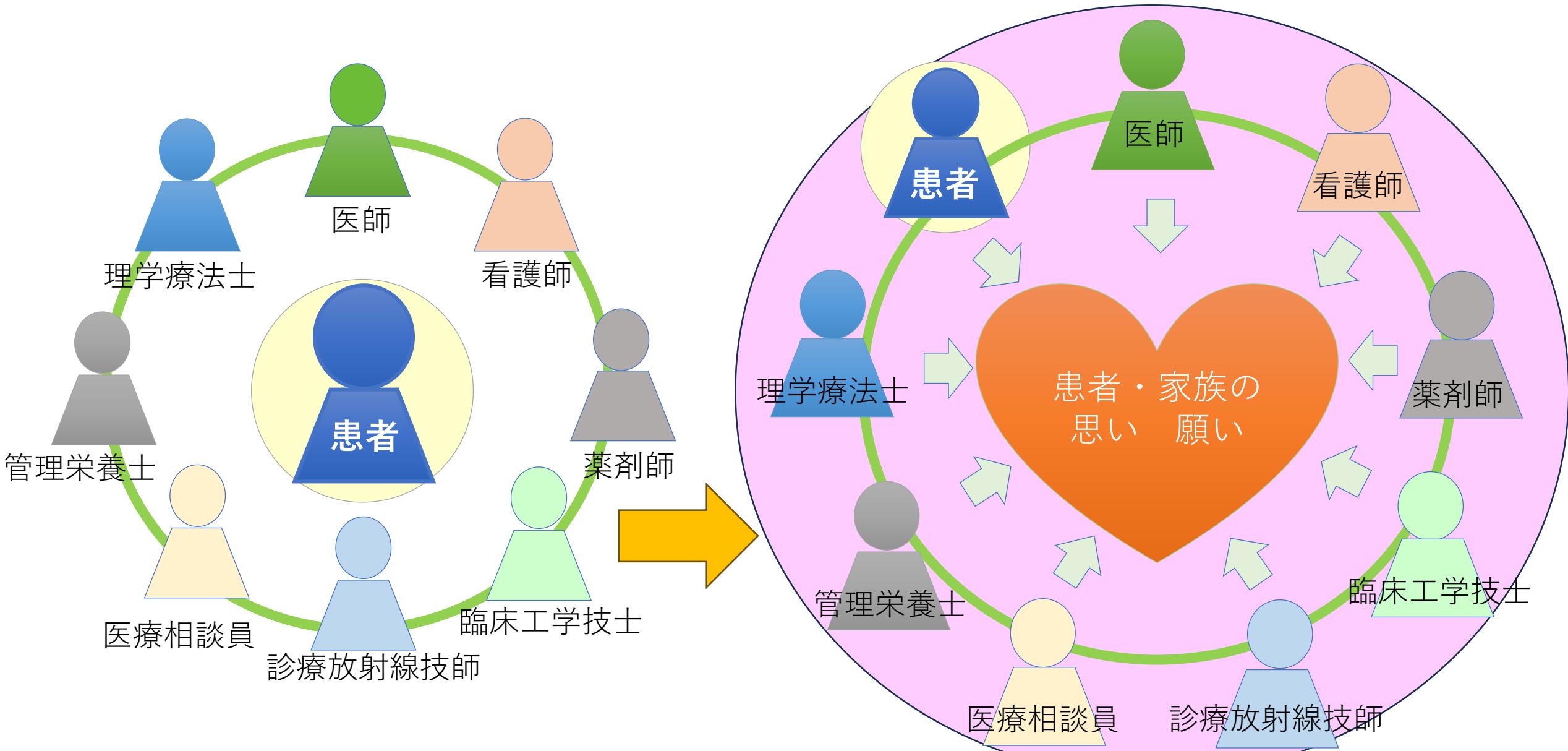


**患者家族の「どうありたいか」を尊重した支援**

自立支援の視点で関わるために行うこと

- 患者の転倒転落危険度を説明
- 病院で転倒転落した場合、骨折や命に関わる可能性について説明
- ADL保持のためには歩行する＝転倒のリスクが高まることを説明
- 患者・家族の「どうありたいか」とそれに対する支援方法を確認

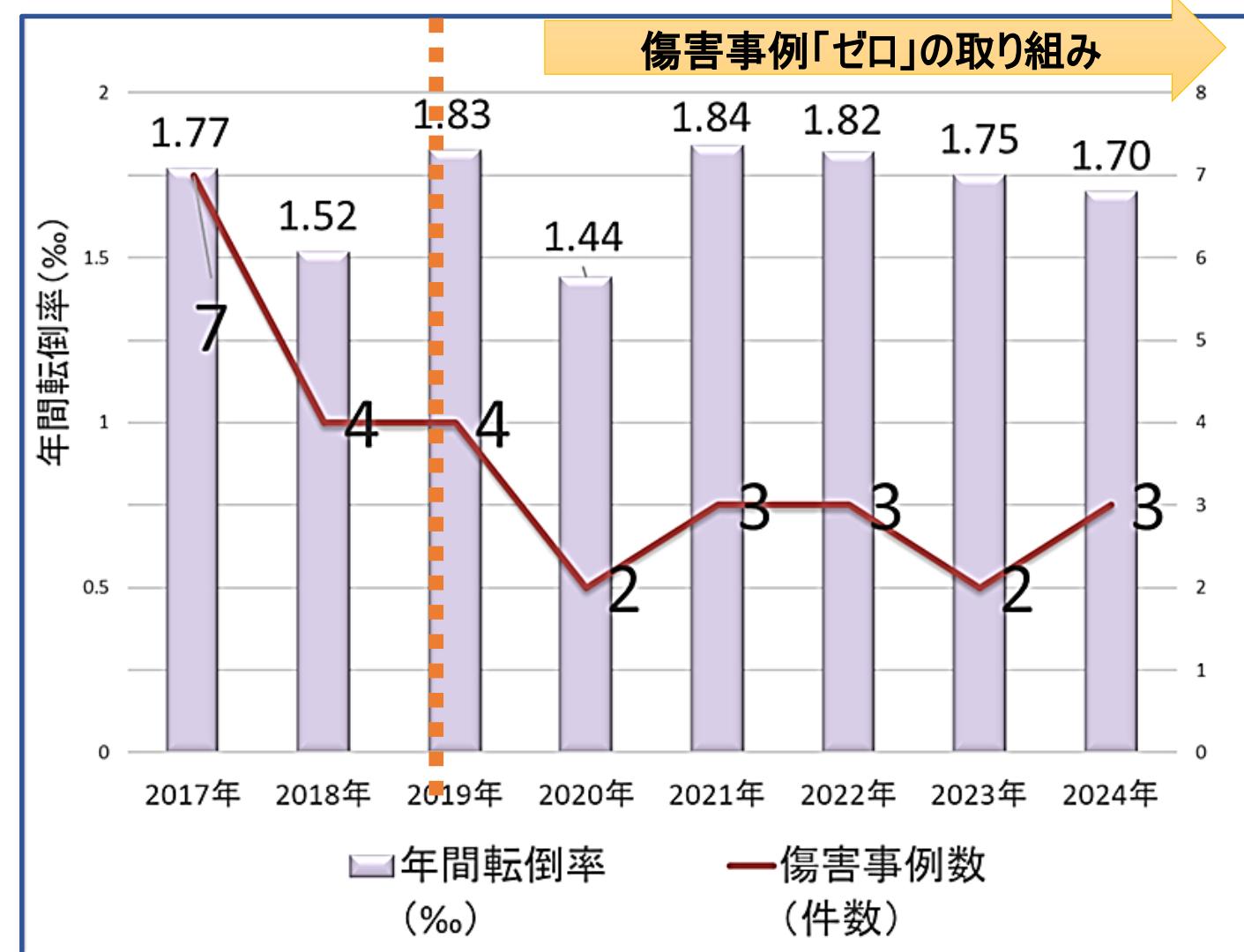
# ■ 患者エンゲージメント



# 1.当院の転倒転落防止策

## ■全職種共通の目標は「傷害事例をゼロ」

当センターの転倒率  
過去8年間の推移  
**1.44～1.84%**



# ■ 職員の転倒転落防止における共通認識

## ●転倒後に起こりうる事態について知る

(治療中断、帰宅困難、寝たきり、最悪の場合「死」の連想)

## ●「家族や大切な人が同じ状況になつたら」を想像する

(自分事として捉える意識を持つ)

## ●患者の疾患や特徴と転倒後のリスクを把握する

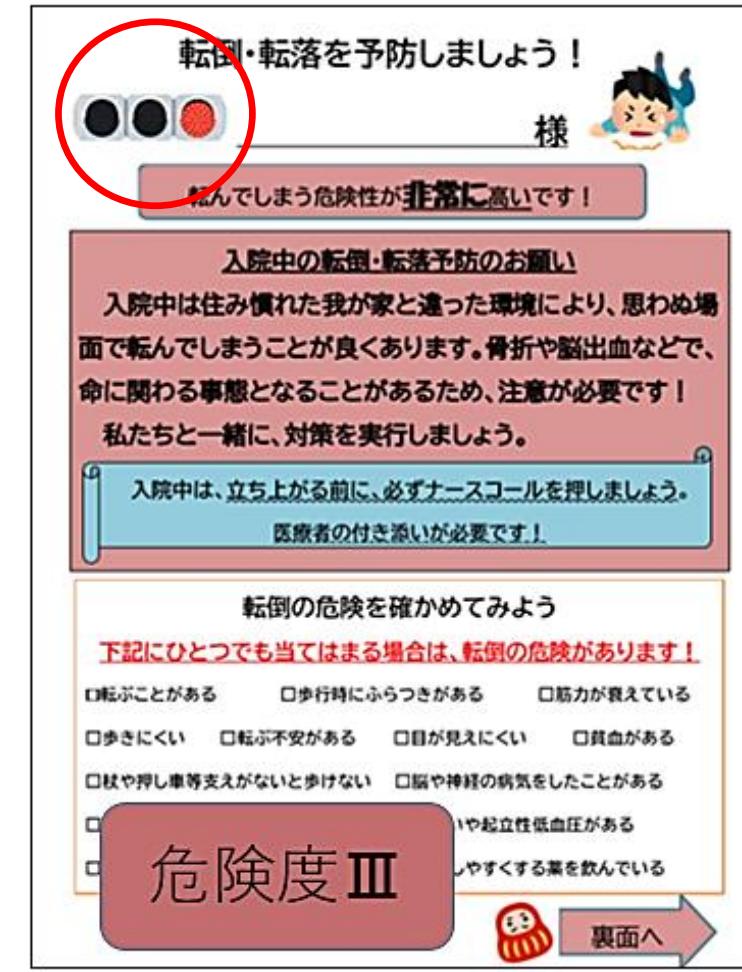
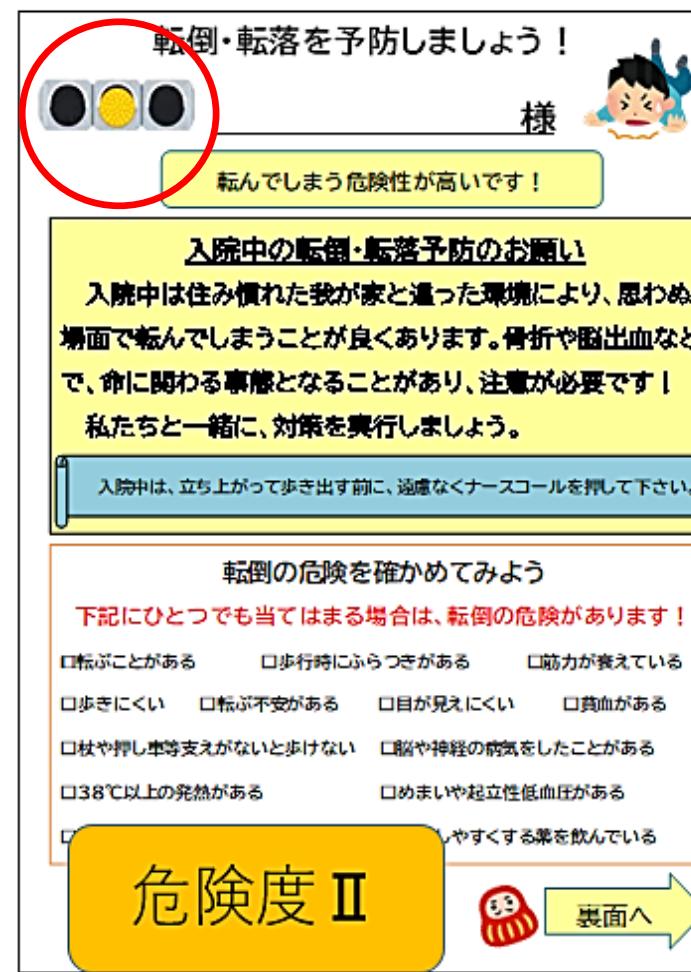
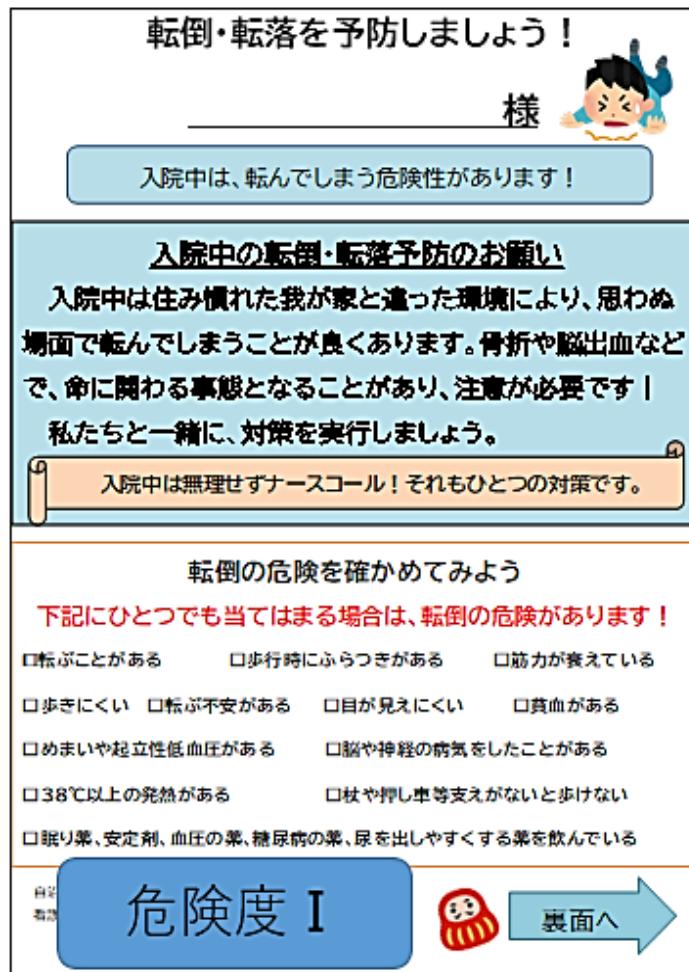
(転倒後のリスクが高いという共通認識を持つ)

## ●自分が出来ることを考える

(声掛け、環境整備、軽症で済む工夫)

## ●転倒転落を防止するための行動を起こす

# ■ 患者-医療者間「危険度」の情報共有

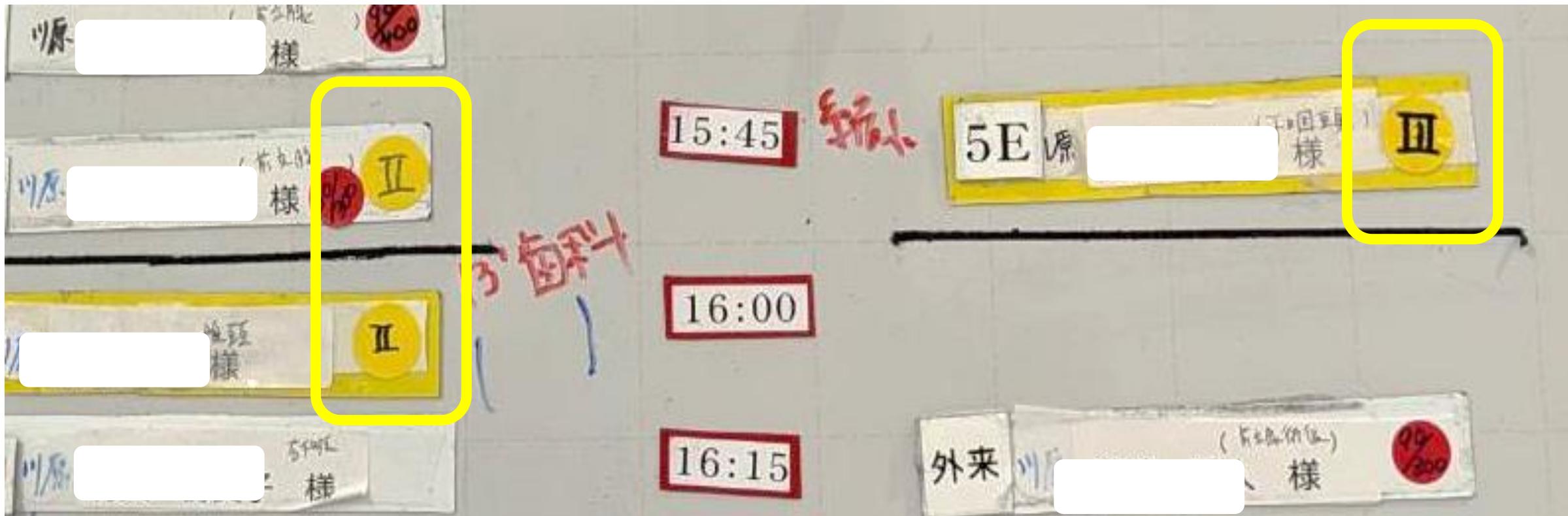


ラミネートされた説明用紙を病室の壁に掛けるルール

## ■ 外来での転倒転落防止策(放射線治療)

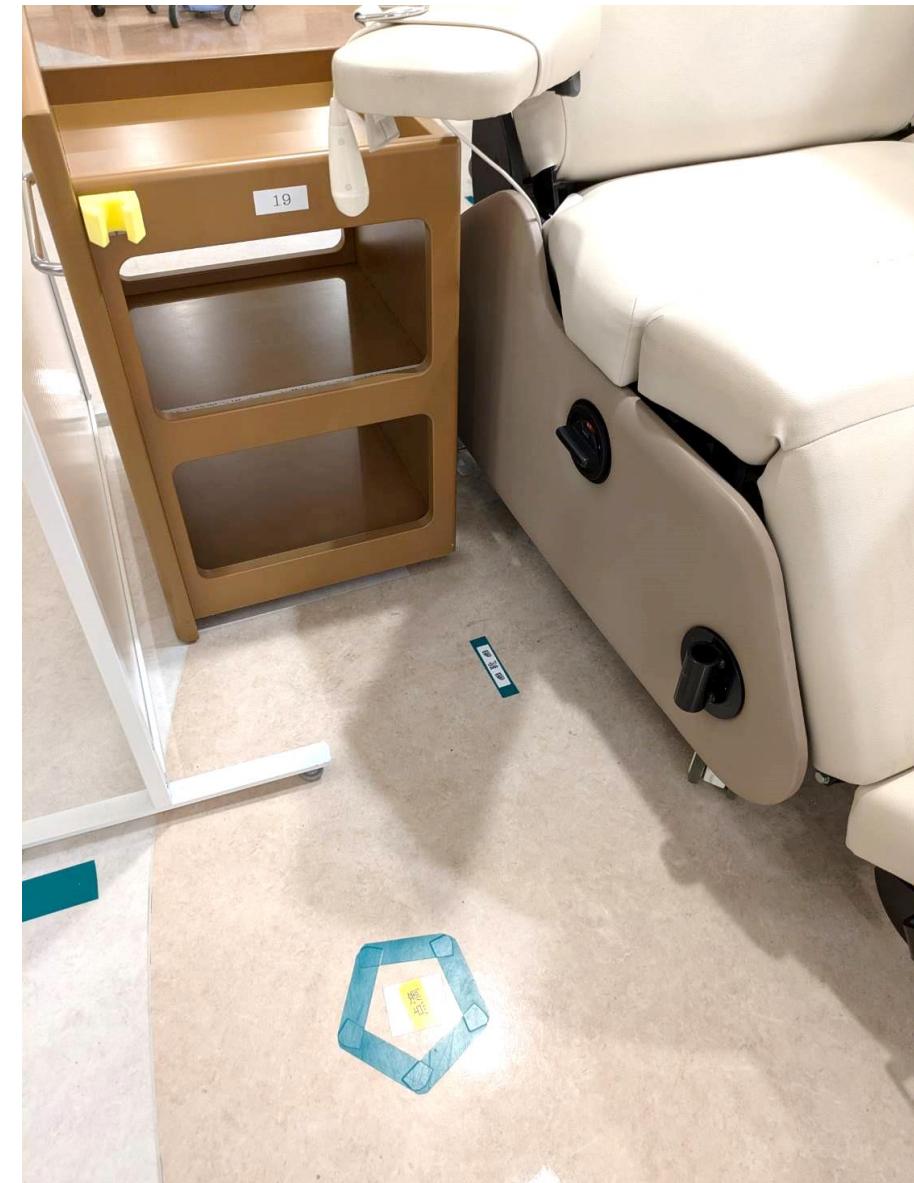
### 危険度可視化

医師/看護師/放射線技師での情報共有



## ■ 外来での転倒転落防止策(オンコロジーセンター)

### 患者説明の徹底 点滴・靴の配置の配慮



# ■ 患者主体の視点で作成したポスターの院内掲示

## 医療安全推進担当者会議

20分/月 × 5回 = 100分

患者エンゲージメントのために  
何が出来るかを検討



患者家族へのメッセージを検討

「転倒転落防止 啓蒙ポスターを見直そう」

ポスター作成



医療安全管理室で印刷



チーム活動時間にパウチ



医療安全管理室が配布

## STOP! 転倒

～病院内でも大きなケガにつながることがあります～

次の項目にひとつでもあてはまる方は  
医療スタッフへお知らせください！  
私たちが安全に過ごせるようにサポートします

- 足元がふらつくことがある
- 立ち上がるときにふらつく
- 手すりがないと階段の上り下りが不安
- 以前に転んだことがある
- 服用中の薬で眠気やふらつきが出る
- 38°C以上の発熱がある



### 3. 患者参加への推進課題

#### ■ クイズ！患者エンゲージメント

転倒転落に関するCBAプロジェクト ディスカッションより

転倒転落防止策において「患者・家族参加が効果的である」と言われていますが、貴方の病院(施設)の現場では、実際患者さんがどこまで参加出来ているでしょうか？

- ①説明を受けているだけ
- ②看護師と一緒に転倒転落防止について考えられている(はず)
- ③自分が主役という意識で、転倒転落防止策を積極的に行えている(はず)



## ■ 急性期施設では患者参加推進に限界を感じている

転倒転落防止策において「患者・家族参加が効果的である」と言われていますが、貴方の病院（施設）の現場では、実際患者さんがどこまで参加出来ているでしょうか？

①説明を受けているだけ



②看護師と一緒に転倒転落防止について考えられている（はず）



③自分が“主役”という意識で、転倒転落防止策を積極的に行えている（はず）



## ■ 「患者説明」「患者参加」の現状

入院翌日は  
手術や処置

病気治療に  
関わるIC  
優先

転倒防止の説  
明は優先度が  
高い

翌日退院も  
増えている



時間がない！

転倒転落防止について  
患者・家族の説明すら費やす時間確保が難しい！  
患者参加の推進に葛藤がある

## ■ 短時間の関わりによる「情報収集」「患者説明」

入院時の患者・家族との会話の中から情報収集できるか？

転倒転落リスク要因の理解 患者さんの病状理解 現在のADL  
自宅での生活スタイル・転倒歴を聞き出すこと  
入院中の療養生活や退院後にイメージする患者・家族の思い・願いを聞き出すこと  
患者さんの状況や感情の理解  
信頼関係を築きながら、的確な質問で本質を見抜くスキル  
質問する技 映像化(イメージ)…

知識と問診力  
＝「看護力」が重要

## 4. 転倒転落防止における患者エンゲージメント

### Current Best Approach

- ・ 医療者が“自立支援の視点で患者と関わることを、患者家族に理解してもらうことが”重要である。
- ・ 患者家族との短時間の会話で情報を収集するためには、質問する側の転倒・転落防止に関する知識と問診力(看護力)を高めることが重要である。
- ・ 患者家族をどこまで巻き込むかではなく、「思い・願い」をどこまで引き出し、一緒に考えられるかが、患者エンゲージメントである。